

【期 日】 令和2年12月10日（木）

【場 所】 1年D組教室

【司会者】 大須賀浩

【記録者】 島山瑠美子

1. 指導・助言の先生（保健体育課主任指導主事 野中 仁史先生）の紹介

2. 授業者（島本 知克先生）から

対象クラスは、担任しているクラスで比較的やりやすかった。交通事故関連の単元を通じて、将来自動車免許を取得することを想定し、今既に乗っている自転車も車と同様で、それらの立場で考えることで歩行者としても事故に遭わないように出来るのではないかと意識して授業を行った。グループワークは、何か一つの題材を扱って答えを導き出すのではなく、個人の意見を述べ合っ気づきを得るものだったので、もっと深く考えさせるようなものにした方が良かったと思っている。

3. グループ協議報告

- Aグループ（後藤俊明先生〔司会〕、三浦直彦先生、古谷先生、川井先生、島山先生）、
発表者：三浦直彦先生

良かった点

- ・3つの要因の振り返り、事例研究、問題解決という流れに、振り返りの効果的な活用。
- ・スライドを見ながら生徒が主体的にノートを取っていた。
- ・事例研究について先生が説明するのではなく生徒自らが読み取る時間。
- ・グループ内での発表を選抜して全体発表を行うという活動に深い学びにつながる可能性があった。
- ・もしもしピットの紹介や自転車を取り上げたことが、生徒の興味関心につながる。
- ・視覚に訴えるスライドの提示や、まとめまで行う時間配分。

課題となる点

- ・グループ内に役割分担（司会、発表、記録等）があれば、更に話し合いが円滑だったのではないかと。
- ・「もしもしピット」の絵を出した時「知っているか？」や、グラフを提示した時「どう読み取るか？」等、発問に工夫があれば良かった。
- ・ワークシートは、最初に出した3つの要因毎に考えさせるともっと色々な意見が出たのではないかと。
- ・生徒の活動時間の区切りを提示しながら進めればよかった。

- Bグループ（門間先生〔司会〕、佐藤幸彦先生、牛丸先生、関谷先生）、発表者：佐藤幸彦先生

良かった点

- ・生徒が少ない指示でも主体的に動き、課題解決に向かう姿勢が見られる授業だった。
- ・保健はいかに実践的か、身近な問題を取り込むかが大事であり、具体例の提示により生徒の興味を引いていた。
- ・「正解も間違いもない。自信を持って」という声掛けで、生徒はためらいなく意見を書いていた。
- ・黒板を活用して活動の段階が示されており、生徒にとって分かりやすい授業の展開であった。

課題となる点

- ・事例はプリントに図示したものを利用したが、動画などの映像を用いることでより鮮明なイメージを生徒に持たせることができるのではないか。
- ・生徒とのやり取りや関わり合いがもっとあってもよい。発表に対してコメントを言ったり、先生のアクションを見せたりすることで、生徒はもっと顔をあげるのではないか。
- ・生徒は車の運転者の立場は想像しにくいと思うのでそこは教師側が説明し、今の自転車の運転者としての立場から考えられることをもっと引き出していったら良かったのではないか。
- ・全体発表の際、個人の意見の中から代表意見を発表するのか、グループとしてまとめた意見を発表するのかという点についても、グループワークのプラス面が出せればよい。

4. 指導助言（保健体育課主任指導主事 野中 仁史先生）より

良かった点

- ・パワーポイントによる視覚への訴え。
- ・本時の目標が授業前から提示され、生徒が授業への見通しを持つことができた。
- ・生徒に間違いを指摘させるだけでなく、適切な行動まで考えさせた点が本時の山場であった。
- ・生徒が爽やかに清々しく、学校全体で取り組んでいる生徒指導が行き届いている。

課題となる点

- ・芸能人の事故の話題で引きつけたが、県内のニュースを取り上げるのも良い。
- ・授業開始から活動に入るまで約20分、生徒はほぼ聞いているだけであり早くボールを返したかったと思う。やり取り、キャッチボールが必要である。
- ・生徒の発表の声が小さく、復唱したりもう一度言わせたり、発表の姿勢を作ることが必要。
- ・パワーポイントで、新国道の写真など使うともっと身近に感じるのではないか。
- ・学習指導要領には、指導の順序や内容は弾力的に扱うことが必要とある。交通安全の単元を年度の最初や交通安全教室のある時期にやるといった工夫も必要。
- ・交通安全教育は、規範意識を高めるのはもちろん行動変容までもっていくことが大切。大きな事故の影にあるヒヤリハットを生徒に出させることが事故防止につながっていく。保健の授業は、知識だけでなく生活に出せるよう意識をもって指導していくことが必要。

